

【福島大学むらの大学アーカイブ 16】 【大熊 Chapter 4】

愛場ご夫妻の大熊町へ懸ける思い

～未来の大熊町へ向けて～

愛場誠さん せつ子さん



【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー 2023年9月26日・大熊町役場いわき出張所

第2回インタビュー 2023年11月23日・愛場さんご自宅

【聞き手】

人間発達文化学類 中村杏紗 行政政策学類 稲垣遼

行政政策学類 沼田はづき

担当教員 鈴木敦己 実施協力 佐藤亜紀

プロフィール

昭和23年生まれの誠さんと昭和25年生まれのせつ子さん。

誠さんは下野上の北向出身、せつ子さんは中屋敷の万右エ門出身。

新潟に避難後、柏崎で会を作り、現在はいわき市在住。

【第1回インタビュー】

—自己紹介をお願いします。

愛場誠：12月で誕生日来て、75歳になります。生まれは大熊町の下野上っていう地区です。下野上1区です。今度(特定帰還居住区域として)除染に入ることになりました、あそこの地区です。線量が高くて今まで除染してもらえなかったけども、皆さんで地区に戻るんだってことで除染してもらうことになったんです。だから私らも生まれ育った所なものですから大熊に戻って生活したいなって思ってます。

愛場せつ子：昭和25年の5月2日生まれの73歳ですか。誕生日来ました。出身は大熊です。(地区は)昔は田村と大熊の境の、何て言うのかしら。中屋敷でも私たちは万右エ門って地区でした。(国道288号の途中に)ため池ありますよね、あそこ右ずっと行くんですよ。右ずっと行って、私らの住んでた所は浪江との境ね。近かったからね。みんな、そこは開拓者ですか。

—2000年代に、万右エ門の集落に住んでる方はいらっしゃいましたか？

愛場せつ子：いや、そこ(万右エ門の集落)には、2000年代(には人がほとんどいなくなっちゃったから)。いや、いたのかしら、何人かは。私たちは出ちゃったからね。(家族ごと大熊の町内に)来たからね。

—せつ子さんは万右エ門の暮らしを覚えてますか？

愛場せつ子：私は万右エ門には高校まで通ってました。高校は双葉、今の翔陽高校、昔のね。そこに入ってたね。小学校は中屋敷地区に分校があったんですけど、私は、本校の大野小に通って。バスで。(分校に行かなかった理由は)なんでしょう。やっぱり親でしょうね。

—大野幼稚園があった場所の、昔の大野小学校本校ですか？

愛場せつ子：今の幼稚園？ そうですね。あの頃の小学校は木造でしたもんね。(バス通学は)結構いました。(万右エ門の集落の中では)私だけだったね。

愛場誠：弟と通ってた。

愛場せつ子：弟も通ってたしね。あと他の人も通ってたかもしれん。覚えてないね、もうね、50、60年だもんね。

—小学校の頃のお話を聞かせてください。

愛場せつ子：小学校だって2クラスありましたよね。そしたら、あの頃は50人じゃなかったですか、1クラス。多分。だって今は20人、30人未満でしょ。でも、楽しかったですよ、本当に。ドッジボールやったとか、雪合戦したとか。(万右エ門は雪が結構)降りましたよ。

愛場誠：(万右エ門は)多いときには70センチも80センチも積もったもんね。

—雪が降ったときは学校に通えなかったのではないですか？

愛場せつ子：1回だけあるんですよ。中学校の間に1回だけバスが通らなくて、うちからずっと歩いて行きました。学校まで。そしたら、お昼でした。そうやって、みんなで歩いて。そして帰りも今度ご飯、食べたら、また歩いて帰ってきました。それが1回ありますね。

—万右エ門には同じ年頃の子は他にいましたか？どのくらいお家がありましたか？

愛場せつ子：同じ年のが、うちの弟が私の一つ下なんですけど、結構みんな上でしたね。一つ上の先輩がね。

—高校まで万右エ門から通った後に、大熊町内に引っ越してきたのですか。

愛場せつ子：いや、双農に行って就職して。就職のね、昔、東邦レーヨンって製糸工場があったんですよ。そこ（浪江）から今度、転勤で大垣（岐阜）に行って（働いた）。そうして今度、帰ってきて1年くらい（浪江）いたのかしらね。岐阜には2年近くいて、そして帰ってきて、またこのうちの浪江に来て、そこで1年くらいで、今度、主人と出会えて結婚したんです。

—お二人は大熊町内で出会ったのですか。

愛場せつ子：そうですね。主人は、いろいろ町のためにやっていたから青年学級とか、いろいろ指導員とかやっていたから。町のためには、あれしたね、やってたね。

—では、青年学級で出会ったのですか。

愛場せつ子：いや、違います。

愛場誠：友達の紹介ですよ。

愛場せつ子：多分、（同じ時期に小学校）だと思うけど、分かんないよね。

（最初は）2人、家族と一緒に住んでました。主人の家族と一緒にね。

—せつ子さんのご家族が万右エ門から出てきたのは、どのタイミングですか。

愛場誠：結婚する前だね。弟が結婚して。

愛場せつ子：弟が結婚して、もうあそこにいたから、今の旭台にいたからね。旭台にもいたし、うちでは農業であって豚を飼ってたんですよ。養豚してたからね。

愛場誠：養豚を大きくやってたんですよ。万右エ門で旭台に来て、規模、拡大したんだね。

愛場せつ子：（家族そろって、養豚を万右エ門から旭台に）持ってきた。

愛場誠：（うちの実家も）乳牛、飼ってた。

—いつ頃まで養豚されていたのですか。

愛場せつ子：20年？

愛場誠：震災のときにはもうやってなかったなあ。

愛場せつ子：（平成になる）前だね。

—大熊で養豚されていた家はどのくらいありましたか。

愛場せつ子：大熊は、養豚は、うちと、あと野上にヨシダ、今のワタナベレイコさんっていますよね。

あそこの実家もやってましたし、あとコバヤシさんっていう方も。

愛場せつ子：一番、多かったのは、うちかね。赤ちゃんから育てて。

愛場誠：繁殖させて。

—その頃、万右エ門はどんな感じだったんですか。

愛場せつ子：私たちの万右エ門は電気が通ったのが東京オリンピックなんですよ。（昭和）38、39でしょ、その頃。それまではランプでした。

だから東京オリンピックのときは電気が通ったからすごかったです。テレビも普及して。（テレビも）買ったんですよ。

愛場誠：テレビは全戸にあったわけじゃなくて、裕福のうちにだけしかなかった。だから私は子どものときは見せてもらいに行きました。

愛場せつ子：今の子どもたちには考えられない。われわれは、そういう時代を過ごしてきたね。

愛場誠：何でもお金で買えっから今は、だから裕福な生活はしてるね、みんな。昔から見たら。

—電気がその頃、通って、水は近くにあったんですか？

愛場せつ子：水は、湧き水。

湧き水で自分のうちの下に湧き水あるから、そこを井戸、作って、その井戸の中にはサンショウウオいましたよ。イモリっていうの？ おなかの赤いのいましたよ。そういう時代でしたね。

—せつ子さんが覚えてる限りで、電気が通るまでの暮らしぶりを聞かせてください。

愛場せつ子：（車は）ないですよ。だから道路あって、豚を飼ってたから肥料、餌が入ってきたわけだね、車で。

だから食べ物なども神谷さんから、お米を買って。（水稻栽培は）やってないからね。田んぼないですから。それで、そこで、お米、買って、しょうゆは隣にあったダイマルさんで量ってたんですよ。そんな時代だったね。

—それは、どうやって買いに行くんですか。

愛場せつ子：結局それは私が中学校、高校のとき向こう通うでしょ。そして今度、夕方、お米を買って持って行くとか、しょうゆを一升瓶に入れて、また持ってく、そういう時代だったね。

だからバス停には学校からは、あそこにあったんだね。毎日食堂の近くにもバス停あったし、あとは、こっちに来ては駅の近くにも停留場、そうやって待ってたね。

（バスはスクールバスでなく）普通の福島交通に乗ってました。（田村から来て、大熊を回って）また帰ってきます。万右エ門、終わって、中屋敷に降りして、そして今度、向こうに行っちゃうんです。田村に越しちゃう。だから私の通ってた万右エ門の停留場に降りて、今度、道路って道路がないんですよ。向こうから歩く、ダムだね、こっちの万右エ門に降りて、ちょっとしたら今度、橋あるでしょ。そこ、ずっと山の中、歩くんですよ。道路、山道を。

だから一番、怖かった思いは、冬は暗くなるの早いでしょ。最後のバスが4時半頃なんですよ、こっち来るの。そして、だんだん向こう（家の方へ）行くと5時頃なってるでしょ、真っ暗。そこ今度バス停から降りて山道こうやって歩いてく。黙って真っすぐ前、見て（歩いた）。雪よりも冬の、秋で暗いのが一番、怖かったね。下、向いて行くの、脇も何も見ず、真っすぐ。

—結構1人で行き来が多かったんですか

愛場せつ子：そう。親は迎えに来なかったからね。

愛場誠：親は仕事、一生懸命ですから。

愛場せつ子：自分でね。バスで来るときは5時に起きたね。6時のバスですから、6時10分のね。でも、そうやって乗り越えてきたんだね。

—万右エ門でのおうちの間取りなど、覚えていたら聞かせてください。

愛場せつ子：私（の家）は大堀行く道路を高台にあるんですよ。その高台が下にいるんです、私のうちは。下に下って一番下が住宅。住宅があって、そして、ここに今度、物置ってあるんですよ。そして今度こっちには豚、飼う小屋。牛、飼ってましたから。そして最後、豚、飼ったんですよ。昔は生活のために父親たちはアスパラも作ったね。こんなひよろひよろって覚えてるからね。アスパラ作ったり、キャベツ作ったりしてましたよね、ジャガイモとか。そして今度その生活のために物置の、その中に洞穴みたいな掘って、そこにみんなこの野菜を入れてたんです。（冷蔵庫）ないから。その中を掘ってジャガイモとか大根とか入れてましたよ。そして食べ物などは大根ご飯、サツマの茎なども食べたね。まず、ご飯って言えば白米より麦のほうが多いですから。なかなか米は買えないでしょ。そして今度お米ないときは、最後ないときは今度、具たくさんにした材料に団子、入れるんですよ。今で言えば、すいとんみたいな。それが主食だったね。

魚は大八さんってあったでしょ。あの方が向こうまで、今、武岡商店つつって、その方も車で、いろ

いろこの日用品、行ったんです。そこに大八さんも行ってサンマを木の箱に持ってくるんですよ。竹を上と一緒に載せていただいて、木の箱に持ってきて、そのサンマを今度わが家では、いろいろありましたから。そこに今度、竹串、刺して、それで焼いて、かめに(醤油やお酢などで)漬けてましたね。魚、寝せてたんだね。いろいろには、こうやって竹に刺して焼くでしょ。焼いたの今度、竹と、かめに漬けてたね。おみそは自分で造ってましたから自分ちで。

愛場誠：みそは農家だから、もうたっぷり造りますから。

—一番好きだったご飯は何ですか。

愛場せつ子：やっぱり白米ですよ。

愛場誠：祝いの時しか食べれなかったもんな、白米は。

—お弁当、持って行きましたか。それとも給食がありましたか。

愛場せつ子：給食ありましたから中学校まで。高校は弁当だね。弁当で買えないときは売店にパン屋さん来ましたからパン買って、それは食べてましたね。(お弁当は) やっぱり、おにぎり多かったね。

愛場誠：弁当は親に作ってもらえないから自分で作りました。

愛場誠：私のうちではニワトリも飼ってましたから 700 羽ぐらい。だから自分で折ってつぶして。つるして羽を取って肉を分解するの。親に教わったもんだから肉の分解するのニワトリは 20 分もかかんないで分解できましたよ。そして売ってましたから何百円ってことで。そうすると、あんまり食べる分だから肝臓がでかくなって今のフォアグラ、ああいうのもできてましたよ。野上の所の人たちに売ってました、ニワトリの肉っていうことで。

肉と卵と合わせて弁当、隠してくんですよ、下に。みんなに取られるから。おかずをこうやって見て、おめえのうまそうだから俺が食ってやるって、友達が取るんですよ。弁当のときに。だもんだから、そのおかずを下に隠して上にご飯やって、そして、ご飯やった上に梅干し上げてね、そして、ぱって開いたときは、なんだ、おめえの弁当のおかずはなんて言われてね。貧しいっていうか、ひもじいっていうか、そういう。ところが下、見てみなって、隠してんだって。

愛場せつ子：だから、いろいろな思い出あるね。皆さんは、あとは中学校、高校とは落ち穂拾いとかしってたね。

愛場誠：小学校のとき落ち穂拾い。イナゴ取り。イナゴ、それは食べましたから。

愛場せつ子：結局イナゴは取ってくでしょ。そうして給食で、給食センターで給食室ゆでてくれるのね。落ち穂は、給食の米がねえから一昔は、みんな拾って。

—学校で、みんなで落穂ひろいしたのですか？

愛場せつ子：そう。

愛場誠：稲刈りをどっかの子どもがいる親から頼まれて稲刈りに行きました、小学校5年生のときは。
愛場誠：落ちる前。だから稲刈りなんて競争ですよ。今の子は危ないからダメだってね。
子どもたち使われますからね、仕事に。だから早いんですよ。指なんて落ちるぐらいに切った人もいたよ。
愛場せつ子：(私は)行ったことないね。学校、一つあったもんね。熊小あったから行ったことない。われわれは思い出あるのが日隠山。権現山だね。
愛場誠：あとは頭森公園。あと高田公園。
愛場せつ子：あそこ遠足だったね。
愛場誠：湯の森公園に行くんだね。あそこまで遠いよ。歩いて。帰ってくると、ぐったりする。ボタンキューだ。
愛場せつ子：日隠山は、初めて日隠山に山開き行ったのが最初かな。町でやる山開きだね。(海には)行かなかったね。
愛場誠：海に行くにしても馬車ですから。バスでは乗ったことねえな、海には。馬車をおやじが操縦しながら熊川の海まで行って、連れてって乗せて。そして、ご飯、食べて帰ってくるんだ。

—それは、ご家庭で持っていた馬車ですか。

愛場誠：うん。それで牛、飼ってましたから。その牛で田んぼだったりしましたから。代かきをしたり、それでやりましたから、その牛に引っ張らせて馬車を。私ら後ろに乗って。牛が引っ張ってく、馬車を。それで家族で。私のうちは乳牛、飼ってたもんですから乳牛に引かせたんだわ。うん。こんなに大きなおっばいを引きながら引っ張って。みんな珍しくて見てましたよ。
愛場せつ子：そうだね。
愛場誠：馬もいましたし、牛も来るし、それで引っ張っていきましたね。
乳牛です。小さい頃は3頭とか4頭ぐらいいました。それを小学校時代に沸騰させて消毒っていうのかな、それして瓶に詰めて販売していました。野上にずっと(自転車で)売りに歩きました。

—それは何歳ぐらいのときですか？

愛場誠：小学校4、5年。それで私は小遣いもらってました。
愛場せつ子：(他に乳牛やってたのは)1軒でしょ。
愛場誠：これはやってなかったですね。
愛場せつ子：乳牛やっても牛乳を売ってたのは1軒だね。
愛場誠：あとは乳牛は、いわきの乳牛っていうのかな、そこに出してましたから。車で(集め)に来てくれました、うちまで。肉用の牛は飼ってません。だって牛を年いって売るときは、もう肉ですから。

—お家の場所と通学について教えてください。

愛場誠：北向。(北向から大野小)学校まで行って2キロぐらいかな。(歩いて)みんなそろって行きましたから。(中学校はせつ子さんと同じで) さっき話した役場のね、そこに私の土地もありましたから、公民館の所に。普通の畑(用の土地)です。(私は帰り道に買い物は)やったことはない。中学校までは3キロですから、自転車で通いました。私のじいさんは農協の組合長やって、そして中屋敷の開墾に入る人たちの荷物運びっていうかな、そこまでやっていました。トラックもありました。こうやってエンジンかけるトラック、ばあん(って回すやつ)。木炭車っていうのかな。

—農業は何をされてましたか。

愛場誠：田んぼやってました。私は、入善町っていう石川県のほう。(正しくは富山)

愛場せつ子：(誠さん)の先祖は富山から来たんですよ。だから、北向は(ほとんど)富山ですね。

愛場誠：後から入らせてもらったもんだから土地は少なかったんですよ。ロッケンショっつってね、6軒の人でまとまって北向に入ったんですよ。そして、おめえ、ここに住めって分担して住まわしたんだね。その間を私は同じ富山のほうから来たからってことで入れさせてもらったんですよ。

愛場せつ子：一番、最後に来たから土地は狭いですよ。

愛場誠：だから1.7ヘクタールしか田んぼがなくなってます。他の人たちは2ヘクタール以上、持っているんだけど。畑もそれなりに持ってたもんだから。開墾して自分の畑にすれば、それを(国が)あげますよっていう形になった。それで結構、(畑を)持ってたんだ、あちこちに。(畑では)トウミギ、分かりますかね。トウモロコシ、デントコーン。乳牛、飼ってる人にはデントコーンっていうんだけど。飼料用の茎も太くなる。(牛に食べさせるための)それを細かく切ってサイロに積む。それ(トウミギ)で私が牛を始めて三十何頭まで大きくしたんです。乳牛やりたいってことで、子どもが6人いますから。(牛は)三十何頭もいました。

—誠さんが成人されてからはどのような経営をされてましたか？

愛場誠：あと山を開墾して一つの自分のうしろの山ね、そこを開墾して牧草畑にしたんです。2ヘクタールぐらいあったね。だから借金では苦労しました。大きな機械も購入しなくちゃなんないし、山も開墾するのに金にかかるし、ブルドーザーもだよな。

愛場せつ子：でも、(避難解除は)今度になるんでしょ。3年後にはなるんでしょ。3年後つつたら、われわれ、こっち(私)は77でしょ。

愛場誠：一緒に住んでる娘が・・・。孫いるんですよ、私らの孫ね。その子が今5歳なんです。だから、かわいい(時期な)もんだから、それを終えるまではいけねえなって。

愛場せつ子：でも、話は、ちょっと変わるけど、大熊もいろいろ、昨日、来ましたよね、3年計画の素案がね。どう思いますかなんて、その項目ずっと。随分あれ見ると変わるよね。だから今のインターの

所には休憩場もできる、直売所もできるでしょ。

愛場誠：インターチェンジの所は私の土地だったんですから、半分。6田んぼ離れたんです、町にやっ
たんですね。それでインターチェンジ造ったの。そしたら今度、道の駅まで造るって構想、持ってるも
んだから、あそこら辺も変わってくるなって話。

愛場せつ子：でも、あの素案、見ると、そんなに遠くはないんだね。3年計画、来てるからね。だから
ね、やっぱりね変わってはほしいけどね。話は変わるけど、そこ若い方と有識の経験者がいなきゃ駄目
ですよ、町は。アキちゃんみたいな人がいっぱいいないと。

愛場誠：大きな構想、持って、こうやって、はいつて言ってくれる人がいないと町も変わってけないよ
ね。変わってほしいですけどね。

ー現在、開墾した山はどうなっていますか。

愛場せつ子：草ぼうぼうって言ってましたよ、(息子の)学が。

愛場誠：東京電力にやってる反射板っていうのかな、それを私の山に作ったんだわ。

愛場せつ子：あれは県の反射板だね、県でやってる。防犯みたいな、あれだね。

愛場誠：原子力センターに反射するように角度、変えたんだね、うちの山から。

愛場せつ子：でも、それは取り壊しましたよ。この(東日本大)震災あって壊したみたいね。

愛場誠：タクシー無線も、うちの牧草畑にした所にタクシー無線もそこに立てたんだわ。

愛場せつ子：でも、あの無線は、まだあるんでしょ。山の高台ね。(あの辺で一番)高い場所で、あの山
に上ると原町の無線塔、見えましたね。

愛場誠：無線塔、見えたし、金華山も見えた。

愛場せつ子：高かったからね。

愛場誠：私らは自然に恵まれた山をうしろにもってたもんだから、春はワラビ採りかな。それから、い
ろいろな山の幸。

愛場せつ子：採ってたね。キノコ採ってたね。

愛場誠：キノコも採りに行きました。ダチョウノエサやりみたいな。バイトしてましたから。牛やめ
てからね。私、手もなくしたし、脳溢血で倒れたんですよ。それで頭、手術したもんだから半身不随だ
ろうってことで、牛は全部、離すべってなって、女房と話しして、全部、離れたんですよ。

ーそれはお幾つぐらいのときですか。

愛場誠：私が42のときだな。

愛場せつ子：42？

愛場誠：厄年だから。

愛場せつ子：厄年は手をなくしたんだよ。

愛場誠：手なくしたんだっけ。

愛場せつ子：脳梗塞と脳内出血は。なったんですよ。でも、発見が早かったからね。脳梗塞も脳内出血も。脳梗塞のときは、お正月に餅切ってたんですよ。

愛場誠：手なくしてから切ってたんですよ。そしたら、なんか力、入んねえなって話してた。切れねえ切れねえって言ってたら、それはおかしいから。次の日、行ったら脳梗塞だって。

愛場せつ子：でも、お正月だったから薬もらって、うちで寝てたんだね、うちに帰ってね。そして今度、正月明けに行ったら脳梗塞と分かったんだね、はっきりね。それから何年かたってから今度、脳溢血になって、そのときは右の脳が全部もう出血してましたから。本当の20パーセントぐらいしかなかったね。

愛場誠：だから間違いなく半身不随になるよって言われて、どこか施設、探してくれって先生に言われたんだもん。原町に、私、行ったもんですから。

愛場せつ子：でも、病院で一番、告げられたのは、先生に、手術しますって言われたのね。お金、大丈夫ですかって言われたよ、病院から。(大手術になるから)お金かかるからって。払わない方もいるみたいね。「愛場さん、お金、大丈夫ですか。」って。でも、かかっても戻ってくるからね。何カ月か過ぎてからね。

愛場誠：負けてられっかって気持ち。

愛場せつ子：でも、2回、脳やってるから本当なったら、どうなるか分かんないね。右の脳は半分、もう80パーは死んでるんだから。

愛場誠：断層写真、撮ったら死んでるのは分かります。そういうふうに言われますから。何、負けてられっかっていう気持ちで、やっぱり精神力だな。

愛場せつ子：手は一遍なくしてでしょ。手なくしたし、脳梗塞なってもこういくみたいね。

愛場誠：逆だからね。だから右の脳やると左、この半分からこっち側になる。私は本当に女房には世話をかけてるって思ってるんだ。

—そこで酪農はやめたのですね。

愛場せつ子：それは脳溢血になって手術してからやめたんですよ。

でも、私一人ではできないから主人にはやめろとは言わなかった。やめて言わなかった。がっかりする。後で、やめるんだよっつってね。

愛場誠：機械もみんな離れたの。トラクターだけ残したの。トラクターとロータリーだけは、ロータリーは後から購入したからね。

愛場せつ子：でも、みんな周りの方に助けていただいて。

愛場誠：助けてもらったから。車、運転できないって思ったの。警察に行ったら話ししたら、左手あるんだから大丈夫だよ。このぼちっていうのかな、あれを購入して付けてトラクター運転してたの。畑やるものがいっぱい、牛いなくなったし、畑もなくしちゃなんないでしょ。だから畑を荒らすわけにいかないからって、そして機械、持ってな、そしてトラクターでなんかして維持管理してた。誰も(代わっ

て)くれる人いねえから、だからインターチェンジ造った所は、畑に土を盛ってもらって、段差があったのを段差なくしてもらった。子どもと一緒に石拾いやって、そういうふうにして随分、苦労しました。

—「手をなくした」のは何があったのですか。

愛場誠：これは他の人には説明すんのは大変なんだけど、機械、止めないで、あれに触っちゃ駄目だよってというのが普通なんですよね。ところが動いた機械に。

愛場せつ子：軍手をしてたから、手袋。

愛場誠：あれね、ナイロンが入ってたもんですから、手袋かけてナイロン取ってたの、こうやって。そしたら、その手袋、軍手が、ぎゅっと機械に挟まって、それで引っ張られたんだわ。でも、自分でこうやって引き抜いたもんだから、ここの所から切れちゃったの。そして骨が出たんだ、こういうふう。それをトラクターにあったロープで、ぎゅうっと縛って、こうやって車、止めてたの。救急車、呼んでくれて。そしたらダンプの運転手は、もう駄目だって、骨、出てるから駄目だと。びいって。その後ろの人のダンプが止まって電話してくれたんだ。そしたら消防車には私の親戚が来たの。

愛場せつ子：ホリカワタケシさん。

愛場誠：ホリカワさんが消防車に乗ってきたんだわ、救急車か。そして大野病院に行ったら私の同級生が手術に立ち会ってきたんだ。はって声掛けてくれたんだから。もうすぐで手術するから、もうちょっとだから我慢しろな。名前、呼ばれて。名前、呼んだって目は開けれねえわな、もう痛くて。それで、うっすらとしながらも一生懸命声掛けてくれた人の話を聞いて、我慢してなって言われて、サクヤマ先生っていう。

愛場せつ子：権威いたからね。

愛場誠：権威の先生がいて、その先生に手術してもらった。愛場さん、かっこよくしたからなって、手を。そして病院にいて次の日から、こっちの右手、使えなくなったら、左手で、ご飯、食わきゃいけないから割り箸、買ってきてって、妻に言ったんだわ。こうやって次の日、ご飯、食べるの割り箸で食べる。これも練習、リハビリだって。

愛場せつ子：だから結局、手なくして、牛は、まだやってるし、無理したから今度、脳に来たんだね。脳に来て、また今度、無理したから、また今度もう一回、出血しちゃった。それで(牛を)やめましたね。

愛場誠：最後に1匹だけ残ってたのが誰と売りに行ったかっつたら学と、学を脇に乗っけて競り場に行ったんだから、本宮に。

—その頃、学さんはお幾つでしたか。

愛場誠：小学校。

愛場せつ子：小学校じゃないよ。学が運転したんだから。だから、われわれの夫婦は波乱万丈ですよ。

でも、こうやって震災なってみて自分のふるさとはなくしたけど、まだ新たに一步って行って、いろいろな人に出会えて、そこで、いろいろできたね、この交流が。

—いわきに越してきてからは、どういう団体でどんな活動をされていますか。

愛場せつ子：広報で、おおがわら会もできるって言って、じゃあ、大川原に行けば、いろいろな町民に会えると思って、おおがわら会に参加したんですよ。それが、つながりだね。

（いわきでは）ふるさとおおくま会だね。（立ち上げから）関わってました。私たちは新潟に避難したんですよ。新潟、柏崎に避難して、そこで会ったのは初めてなんですよ。

愛場誠：新潟で初めて。

愛場せつ子：あつまっかおおくま会をつくったんですよ。

愛場誠：井戸川洋一さん、あの人と2人で。

—あつまっかおおくま会のきっかけとなったお話を詳しく聞かせてください。

愛場せつ子：避難して行って、お店に行くと、（柏崎だから）いわきナンバー探すんですよ。そこで井戸川さんと知り合ったのね。その前には、また別のスーパーに行って避難して、着る物がないでしょ。ジャンパー着てったんですよ。お宅ら、この人でないねって言われたね、言葉が違うから。でも、向こうの柏崎の方も2回、地震に遭ってるから、いろいろご支援してくれましたよ。

愛場誠：パンを作ってきて持ってきてくれたよね。隣に私の息子がいましたから、学の兄貴、ススムっていうんだわ。それが子どもと一緒に避難したもんですから。

愛場せつ子：だから向こうに行っても、われわれは、（柏崎の）みんなで会うと泣きたいけど泣くことできかないんだよね。いつも笑顔で接しちゃうの。そして、どうして愛場さん泣かないの？って言われて、泣いてる暇ないんだよね。うちに行くと泣いちゃう、夜は。でも、みんなで会えば笑顔で接していかないと相手も心配するし、そこで出会えて、いろいろ、われわれも勉強したね。本当に今でいう中間みたいな施設の六ヶ所まで行ってきました。いろいろな会、入って、ずっと歩いてきました。

—それは、あつまっかおおくま会の皆さんで行ったのですか？

愛場せつ子：別の会に入って。

愛場誠：私らだけ。柏桃の輪っていうのが、それが柏崎に原子力関係の柏桃の輪っていうのがあるんですよ。だから、その会に入って私らも同じ大熊にいて原子力のこと本当に分かんねかったなど、勉強してるわけじゃないから。だから少し勉強しとくかってことで2人で食事会やったんですよ。そういうのがきっかけで、その会に入らせてもらったの。ただ、その人たちは、すごい学者さんを動かしたんだよね。

愛場せつ子：経産省の木野さんと、あと教授、今いろいろ講演してる山名ハジメさん。あの方と出会い

して、いろいろな方と出会いしてきたんですよ。

愛場誠：そして学者は何か私の会にインタビューに来るんですよ。それで、もう私ら絶対、泣き顔、見せなかったから。前を向いてしか進まねえって、はっきり言ってましたから。

—インタビューを受けるにあたって何か困ったことはありましたか。

愛場せつ子：一番、困ったのは、新聞の取材で、われわれが言わないことも新聞は書くんですよ。

愛場誠：新聞には私ら言わないことまで書くもんだから、うちのおやじは、こんなこと言わなかったな。

愛場せつ子：息子が立ち会ってくれたからね。

愛場誠：息子が柏崎の東電にいますから。その息子たちが、こんなことおかしいっていう話になったから、だから私ら、報道関係者で取材に来たときには一回、新聞に出さず記事を見せてくださいって。それ、許可しない限りは出さないでな。それを約束できんだったら報道、インタビューをしませんよっていう話でした。だから来ない。新聞はなかったね。

愛場せつ子：新聞、テレビ局、大変だったね、本当に。大熊で会、立ち上げたのは、今度、新潟の県庁に行った。県の復興対策。そこで、いろいろ触れ合いしてやってたんです。(取材が来るのは)そこで映ってる所のテレビ局、来たり、新聞局、来たりしてやってね。

—あつまっかおおくま会は、いつ頃設立されたのですか。

愛場せつ子：向こうは震災すぐですよ。(立ち上げたのは)2012年だね。だから早く、どことなく全国で一番くらいにつくっちゃったから大変だし、取材は。

愛場誠：だから名刺だって、どっさり来るんですよ、報道関係がね。大熊とか双葉郡内の町村会で会とかなんかあるときは。

—当時は柏崎にいたそうですが、いわきに戻ってきたのは何年頃ですか。

愛場せつ子：2016年だね。今年で6年目。帰ってきたばかりだから行ってみようとなって。

愛場誠：会つくって話し合ったりなんかしない限りは前を向いて進めないからっていうので、亜紀ちゃんに会はずだったほうがいいよって。

—新潟の経験について詳しく教えていただけませんか。

愛場誠：実際やってきて本当に、みんな楽しくやってたんですよ。前も進もうってことで。でなかったら、みんな、しゅんとしちゃうから、会をつくって役場から真面目なお金をもらって、そして少しのお金でいろんな所、見て歩くってっていう話だからね。バスをチャーターしたり何かして、随分、長野とか、あちこちに行きましたよ。

愛場せつ子：柏崎ね。だから一番、最初、向こうで会つかったとき、柏崎では、避難者交流会みたいないろいろやっていただいて、そこで、われわれが今度、立ち上げてやって、そこで山古志、行くことになったの。バスはないわね。そのとき市長さんかな、バス出してくれたの。山古志の水没村、あそこ見てきたんですよ。やっぱり震災って一步、前、でない駄目だね。

愛場誠：だから、いろんな経験してきましたよ。それが、いい勉強だったんだね、私らの。

愛場せつ子：今現在こうやって、また皆さんと知り合えてね。

—大熊町の好きなおところを教えてください。

愛場せつ子：全般だね。だって、みんな目つぶって、いろいろあるんですよ。大熊、夫といろいろあって、そして、そこで今度、草野から大熊、行くでしょ。精神的に気持ちが違うもんね。同じ、このいわき市と大熊、全然、違うね。

愛場誠：空気が違うっていうか、そんな感じだろうな。大熊に行くと安心するんだ。自分の生まれ育った町だな、町に戻ってきたなっていう感じで。だから、しょっちゅう行くんだ、大熊にね。若い人には理解できねえかもしれない。

愛場せつ子：ぐるっと回ってみると、ここ、おうちないって、別の所に、またある所もあるでしょ。こうなんだなって見てくるもんね。(景色にある思い出が)ありますよね。ただ、一番、残念なの、町がみんな壊しちゃったでしょ。だから、そこに何があったのか頭に大変だね。町、変わってるもんね。メイン通りは変わってるから。一番、大熊、全般だね。熊川こんななったとか、熊川こうだったりとかって、ずっと見るからね。

—大熊町の人のおいしいところについてはどんなものがありますか。

愛場せつ子：人柄は人それぞれあると思いますね。だから、われわれ年相応でしょ。そこに抑え付けることもできないんだよね。向こうから声掛けてきても、そうなの？って聞き役だね。そうしないと大柄に言ってもまとまりはないね。ここで、こう言ったとなると向こうに住んでる方が反感、買っちゃうんだね。

愛場誠：何、考えてんだって思われちゃうから。

愛場せつ子：だから復興庁の所、住んでる方、こういう人、見ると、いろいろな方いるから、そこで、こうだよって言えないもんね。言ったら大変だもんね。あの方、言ってるってなるから、そうなの？って聞く役だね。だから同じ年齢だと構うけど、若い方、われわれ、こうでしょ。そこで、抑え付けることできないもんね。そうだよって聞いているね。

愛場誠：私らも相手に呼ぶとき自分より年下でも呼び捨てはできないね。できるだけ、さん付けとかなんかするようにはします。これだけ気を使うんだね。

—大熊町の自然で良かったなと思うことは何ですか。

愛場せつ子：秋はキノコ採りでしょ。

愛場誠：自然は豊富だね。私の母親もキノコ採り名人だったんだわ。

愛場せつ子：でも、場所は教えてくれなかった。

愛場誠：だから自分で探さなくちゃなんないから、私も山はずっと歩きましたよ。それで一回だけ羽黒のため池に落っこって、警察犬、出して探してもらいました。

愛場せつ子：でも、羽黒のため池に落ちてもしすぐは行けないんですよ。警察の方が来て、ずっと家族構成から聞くんですよ。警察の方、2人、来て、家族構成、聞くの。長男から最後までね。

愛場せつ子：順序があるのかしらね。それで最後に、これで間違いないですか、じゃあ入ろうってなりますよ。そこで今度、全般に頼むと金がかかるみたいね、搜索すると。そこそこ役場の何とか課あるんだね。その人が、ちょっと待ってして今度、役場であれしてくれたの。だから見つかったもお金はかかんかったの。そこに警察犬も出たけどね。

愛場誠：警察犬、飼ってる所に、後に、お礼に行ってきました。

愛場せつ子：だから警察ってこういう人かなって思ったよ。全部、段取り聞いてくるの。決まりみたいですよ。これでいいですかって言うと、この下の警察が、はいつてやるみたいだよ。

愛場誠：つなぎ着て、長靴、履いて、籠、背負ってんですから。この獣道を真っすぐ歩いてたら、どおんと落っこったんだ。だから、よく助かったなと思って。

—それは幾つぐらいの時ですか。

愛場せつ子：今のススムの娘を幼稚園に迎えに行ってたんでしょ。

愛場誠：幼稚園に迎えに行くって山にキノコ、採りに行くっていうことで、ちらっと山に入ったんですよ。そしたら道、分からなくなったんだ、帰る所。

愛場せつ子：でも、北向地区は結構お世話になってるんですよ。うちの主人の前も山に行って帰ってこなくてね。

愛場誠：じいちゃんね、消防で搜索、出したのかな。

愛場せつ子：あと、もう一人の方も帰ってこなかったんだね。

愛場誠：でも、籠だけはもったいなくて、後、取りに行きました。

愛場せつ子：うちの主人は、こうだとうですから。みんな助けていただいたね。本当、助けていただいた。

愛場誠：いろんな人に助けられたね。だから、今があるんですよ。

—お二人が大熊の町内に引っ越してきた頃の大熊町は、どんな町でしたか？

愛場せつ子：大熊町いろいろなメインがありましたよね。大熊町では、盆踊りとか、大熊町の盆踊り、

部落でもやりましたが、町も独自でやったんですよ。町民盆踊りね。スポーツセンターの所。やって、そこには、いろいろな企業が来てやったんですよ。そこプラス今度、町民大会やりましたね、運動会ね。

愛場誠：あと地区ごとの合わせですから町民大会は。

愛場せつ子：あと、ふるさと祭りやって、いろいろな品評会かな、町の農産物のやってんのがね。一番の思い出、やっぱり、ふるさと祭りの餅つき。いろいろ方が来ますからね。

愛場誠：(みんな持ち寄って)臼など、本当にいっぱい数、集まったね。50以上、臼ありましたね。だけど、それなりに、みんなの餅つきも上手だったし、それなりの餅はできたんだよね。町民大会、ふるさと祭りやると歌手とか、ああいうの大熊で呼ぶんですよ。他の町が無料で物、食べられるし、歌手も聞かれんだわ。宮城から来て、他の町から、わざわざ来てたもんね。

愛場せつ子：そういう思い出あるね。

愛場誠：それは大熊、裕福だったからね。財産を東京電力関係の企業体で随分、入ったんだな、町に。固定資産税っていうのかな。だから大熊、裕福なもんだから、大熊はいいどなって他の町村から。

一原発ができてから、だんだん町が裕福になっていったのですか？

愛場せつ子：そうですね。

愛場誠：働きに、今までは出稼ぎしなくちゃ生活できなかつたんだから。その当時はね、われわれの親が。出稼ぎ行つたのが原子力発電所の着工、始まって、発電所務めたの。私の同級生は、随分、原子力発電所で造ってましたよ、働いてました。

一集落はどう変化しましたか。

愛場せつ子：(人が)たくさん増えましたね。増えたね。

愛場誠：集落も増えたね。

愛場せつ子：本当に町民よりも結局、東電とか他町村、違う方が入ってきたもんね。でも、この地区に入る、みんな楽しくやりました、うちの町のとことか。

愛場誠：育成会っていうのがあるでしょ、子ども育てる。その中に入ってくるんだよね。東京電力の社員の人たちが、どんどん入ってきたもん、子ども多いから。学校関係でも付き合いましたし、あと球技大会とか、それなりにも入ってきました。

愛場せつ子：部落でも球技大会やったからね。本当に球技大会やったり、餅つきとか、やってたもんね。

愛場誠：海水浴もやったしね。

—大熊町で復興が進んでいると感じることはありますか。

愛場せつ子：行きたんびに結局お話、聞く、町民の方も帰ってるんですよ。だから、それが復興の証じゃないかしらね。去年から見ると結構、帰ってる方いるみたいですよ。そうして今度われわれも家族で、梅田商店ってあったでしょ。あそこのメイン通ったらば造成してる、うち建てる方いるんだね。こうやって復興が進んでると思いますよ。行きたんびに町が変わってるから復興が進んでんだと思うね。

愛場誠：新しい車、何台か見るから、うちに帰ってきてるんだって。そして基礎工事やって、ここの所にうち造んだなって見てきながら感じてきます。行ったときは時々ちょっと遠回りして、ぐるっと回り込んでくから、そのときに、うち造る基礎やってっから、一生懸命やってから、工事やってっから、ここに住むんだなって。それで新しいうち造ったりなんかしたときには復興っていうこと、そこ感じますね。

—現在の熊町の変化についてどう思いますか。

愛場せつ子：町、今の熊町もだいぶ変わってきましたよね。ただ、そして今度ゆめの森の学校もできましたよね。そこで今度これからですよ。ゆめの森の学校も、どのくらいの子ども、今は31人、これからどのくらいの入ってくるか、そこが一番のわれわれは課題っていうか、ありますよね。でも、昨日の資料、見ると、ゆめの森は結局いっぱい遊んで学びする学校なんですよ。いっぱい遊びながらあれる学校だよ。いっぱい遊ぶんでしょ、あれ。学校なんですよ。だから、どうなんでしょうね、それが見てみたいですよ。

愛場誠：心配事もあるからね。そうやって遊ばせて自由にさせて、われわれのときの学校と全然、違うなっていう感じはしますね。どうなのかなって。どんななっくのかなって心配だね。

—ゆめの森以外についてはどう思いますか？

愛場せつ子：復興住宅ってありますよね。そこでは外で歩いてる方がいないですよ。それも寂しいですよ。結局申し訳ないけど若い方がいないわけでしょ。高齢者の方なんですよ。(若い人は家に引きこもっている)だから、この間も、おおがわら会、行ってきたんですけど、そのときは本当に若い方いなかったもんね。私としては学校があれば学校の方も何人か(学校の方の)子どもさん来てるのかなと思ったら、いなかったです。いなかった、本当に。もう半年たつでしょ、帰ってから。一步前に出ないと大変ですよ。だって、うちの中にいたら今度は引きこもっちゃうでしょ。(そういう人は)多いでしょうね。そういうの心配しますね。そこで今度、子どもプラスお父さん、お母さんをどうやって外に出して交流していくかですよ。あそこに住むってこと、ずっと学校も生活していくんでしょから、本当に引きこもってたら、下手すると、うつになるんじゃないですか。それを心配するね。若いお父さん、お母さんが外に出ないと。ただ、イチゴ狩りのときは結構、若い方もいたんですよ。そこはほか

ら来た人も多かったもんね。だから、そういう所に出て、この大熊の人が交流していかないと。運動会をやるときは楽しみですよ。初めての運動会って見に行こうかってなるんですよ。そして、第一印象が大事だと思うんですよ。行ってみたらってなるでしょ。

—これから大熊町にどのように関わっていきたいですか。

愛場せつ子：できれば私たちも大熊には帰りたいです、正直。でも、私たちの北向って3年後でしょ（避難指示が解除されるの）。それからが大変なんですよ。ね。（おうち自体は）残ってます。とても住める状態じゃないですから、だから、帰りたいのが本音だね。そして、そこに行けば地元の方との交流ですか、それもしたいですよ。

—今の太川原はまだ交流が少ないと感じますね。

愛場せつ子：弱いですね。おおがわら会も最初は（人が）いっぱい出ましたが、今回は少なかったですよ。（うちに帰りたことについて）息子にも言われました。「なんだ、じいちゃん、ばあちゃんは帰んじゃなかったの？なんて。平屋でも造って住むんじゃなかったの？」なんて言ってますよ。（三年なんて）あつという間だね。それまで健在でいれるかどうかですよ。

愛場誠：今、100歳時代だからっていわれるけども、自分が何歳まで生きんだか分かんないから。

—もし大熊に戻ってくる場合はお二人ですか？ ご家族も一緒ですか？

愛場せつ子：（今は娘夫婦と住んでますが）2人のほうがいいですよ。われわれはそういう夢を持たないと。何だかんだつつうて大熊ですよ。これから新しい大熊に行ってみたいね。昔の大熊はないけどね。

愛場誠：だから孫に大熊に帰って、そして花を畑いっぱい植えたいなって言うんです。すると孫におまえもくっか？って言うと、いやあって言うんだね。泊まりには来るかもしれないけど。

—新しい大熊町にはどんな町になってほしいですか？

愛場せつ子：図書館とか、公民館とか、いろいろできるでしょ。できても、いくら利用するかですよ。ね。じゃあ町に帰還してもらわないとね。本当にいろいろ造っていただけるといいんだけど、これからここに、大熊に帰ってくる人ですよ。おらは大熊に来て関係ないでも困るでしょ。そこをうまく、この町の発展のためっていうか、大熊町っていうのをなくさないでやってほしいとは思うね。

愛場誠：（大熊の人たちは）全国に散らばってっからね。家庭を持った人も全国に散らばって散々してるわけだ。そういう人たちが時々、大熊でのこと考えてくれるといいかな。

愛場せつ子：でも、帰ったら大熊の人、関わりあって、大熊ってこういう町だなんていうの協力してみたいね。自分の人生ね。

一逆に、後世の人たちに残してほしいところは何ですか。

愛場せつ子：昔の(ものが)ないもんね。変わってほしいのはあるね。いろいろ造ってるでしょ、施設ね。その一角に大熊町全般の部落部落のこういう所ありましたっていうの展示してもらってもいいのかなと思って。そうすると今の時代じゃなくて、結局、子どもさんと孫さん帰ったときに自分ちはここにあって見ることができるでしょ。こういう場所があったねっていうのできると思うんですよね。本では見てたけど分かんないでしょ。今は全然ゼロですから。これからの子どもたちには、そういうのがあったほうがいいのかと思うね。うちの子どもたちも今年5月に来たんですよ。そしたら結局、自分のうちに行ったみたいね。見てきたよって、お墓に行ってみたよって。学らも行ったみたいね。今度、今のあるうち壊して、そこでバーベキューしたいなって言ってますよ。そうやって物はなくなるけど。だから町としてどっかの一角を今度、大熊町全般の震災の前のここにこうあったよっていうのも大変でしょうけど造ってほしいと思うね。そうすると今度これからの子どもたちが大熊に行っても、そこに行けば、お父さん、お母さん、こういう所にいたんだねとか思う(と思う)んですよ。ここに何かあったねと。それが最後はね。

一これから大熊町に移住してくる人に伝えたいことは何かありますか。

愛場せつ子：この伝えたいことって難しいんですよ。言っていていいか悪いかね。われわれがこう思うっていても相手側がどう受け取るかですよ。難しいですよ、それは。本当に来てくれる方が半信半疑で来て、何、言ってるのってなっちゃうでしょ、言葉がね。それが一番、難しいと思うね。言っただけで難しいと思う、言葉が。

一上手に伝えられるとしたら、どういうことを伝えたいですか。

愛場誠：向こう三軒両隣っていうけども隣近所同士、仲良く、移住しても仲良くしていかないと、私ら子どもがいるんだけど、こっちに、いわきに来て、隣近所の人たちと仲良くしないと、けんかしたんじゃないからね。仲良くして生活しないと、これから世の中やっていけねえって。

愛場せつ子：草野に住んでも最初、大変だったもんね。避難者だけあって本当、最終的にお金になってね。おまえらは、お金もらって(って言われて)。ほんで、杉の木、1本、なんぼだったなんて聞かれて大変ですよ。だから、そういうとこね。

愛場誠：だから新潟の柏崎にいたときも、私、散歩するもんですから知らない人と会うわけだ。そうすると、おめえら、どこから来たかって聞かれるんだよね、最初。すると、こういうわけで避難してきたんだって言うと、おめえら、うんと金もらったべ、って言われる。だから、よその人にそういうふうにししか見てないんだよね。避難者っていうのは本当にお金で解決されるから、そういうことを言われるのは、うんと悔しいけども、周りでは、そういうふうにししか見てないってことだね。

—大熊町への要望や願いはありますか？

愛場せつ子：大熊町、変わってほしいっていうのは、大熊に入っていくところありますよね。大熊に入っ
て役場に行く所ね。あそこに大熊町役場って、できればポール作ってほしいね。ちっちゃい看板あるけ
ど。でっけえ看板、欲しいね。

愛場誠：やっぱりメインとなる双葉郡内で、ちょうど中心なんだよね。

愛場せつ子：今んとこ本当に俗に言えば、日本全国いろいろ集まってきてくれるでしょ。だけど、こう
いう看板がないから。主人もいつか行って、信号機ありますね。あそこに大熊町役場っていうのあつて
もいいかなと思うね。だって下から来ても上から来ても分かんないもんね。

愛場誠：双葉町が、あそこに看板あったんだよね。原子力の町だとかってありましたよね。あれぐらい
に大きな。

愛場せつ子：だって(役場だって)分かんないもんね。まして今、学校で(の運動会で)来てるから結構い
ろんな方、見学に来るでしょ。でも、分かんないと思うよ、今の所ね。

愛場誠：最初は大熊町はナシとキウイのフルーツの町ってことで、それで宣伝してたんだけど、今、
何にもないから。

愛場せつ子：それも一歩、前進としてやっていただいたほうが、これから町にいいんじゃないのかなと
思うね。

愛場誠：小さい看板だもの。

【第2回インタビュー】

—お二人はご結婚したのは何年ですか。

愛場せつ子：47年だね。47年の12月4日です。昭和47年。

愛場誠：もうすぐ結婚記念日です。

愛場せつ子：(次で)50(年)。

愛場誠：51年。

—お二人は何人お子さんがいらっしゃるのか教えてほしいです。

愛場せつ子：子どもね。

愛場誠：6人。

愛場せつ子：五男一女です。

愛場誠：(長男が生まれたのが)48年。

愛場せつ子：48年の6月24に長男が生まれまして、その次の49年だね、娘。6月15です。年子。そうして今度、次男が51年だね。51年の7月22。三男が53年の4月5日です。そして今度、学が59年の・・・。

愛場誠：12月。

愛場せつ子：12月の29だね。そうして今度、五男が、61年の10月29だね。(長男と五男で13歳)違いますね。

—6人のお子さんと一緒に参加して楽しかった地域のイベントで特に楽しかったものは何ですか。

愛場せつ子：一番は盆踊りだね、部落の。うちから公民館までは歩いて行くんですよ。子どもたちが行って。そこで行くと、友達もいますから、それで遊んでましたね。(日が落ちた頃に歩いて向かって)盆踊りは5時頃から役員の方は流してるのね。盆踊りの歌をね。音楽流して。

愛場誠：スピーカーだね。

愛場せつ子：そして今度、7時から始まるんだけど、本格になるのは8時だね。踊りが何がなくなっていくのはね。(一時間踊っていた人も)中にはね。

愛場誠：出店は自分たちで店を。ジュースを買ってきたり、それから、フライド・・・。

愛場せつ子：チキンやったりね。あとはヨーヨーでしょ。

愛場誠：そういうのはみんな自分で、自分たちの区で準備して出してやりました。私は店やったことないです。もう盆踊りのほうを主体的にやった。ぶっこみとか、笛とか、歌とか。全部やりました。

愛場せつ子：(夏祭りには)毎年参加してましたよ。

愛場誠：震災まではね。

愛場せつ子：(震災後は)止まってましたね。止まりましたから。(盆踊りが再開して)部落はやんないけ

ど、町でやったのがメインだよね。(解除前の 18 年に八幡)神社でやったでしょ。震災前も、(町民盆踊りを)総合グラウンドでやったんですよ。町民盆踊りでいろいろな企業が参加してやったんですよね。

愛場誠：大熊は企業体がすごく多いものですから。第一原発あるでしょ。そういう関係で企業体が大いに協力してんだよね。踊りなどはみんな着物を着まして、そして踊ってたですね。で、その日に、盆踊り終わってから花火大会やってね。それでみんな楽しんで、今年も終わったなって感じで。

愛場せつ子：(大熊町内全体での盆踊りのほかに)みんな部落でやってますよ。

愛場誠：各部落でお金を出し合ってたね。

愛場せつ子：(ひたすらみんなで太鼓を叩いて歌って踊った)その太鼓はみんな部落によって違いますから。太鼓も歌もみんな違うから。

一他のお子さんと一緒に参加した行事とかがってなにかありますか。

愛場せつ子：やっぱりうちは一番の思い出は、ハワイアン(センター、現在のスパリゾートハワイアンズ)に連れていきましたね、子どもたちを。

愛場誠：だって結婚した当初、ハワイアンセンターに私ら泊まったんですから。

愛場せつ子：子どもができたので遠くまで行けないって言って、ハワイアンに泊まって、今度、次の日が、私が勤めた岐阜に新婚旅行に行ったんですよ。岐阜に行って泊まったのは、今度、寮でした。女子寮に泊まってきました。私のいた女子寮に泊まってきました。勤めてたからって、いわきに一泊して、次の日は今度、私の勤めた岐阜に行って、その女子寮に泊まって・・・。(誠さんも)一緒に行きましたよ。新婚旅行ですから(特別に)。

愛場誠：だから計画した旅行じゃなくて、計画なしで。

愛場せつ子：当たりばったりだったね。

愛場誠：ばって電話してその会社で泊まったんだ。

愛場せつ子：(ハワイアンズに子供を連れて)行きました。で、必ず迷子になってね。

愛場誠：結局、集中して子どもっちゅうのは見るんだよね、物を。集中して見ると周り見えなくなっちゃうから。そうずっと自分のきょうだいとか、親がどこに行ったか分からなくなっちゃう。で、館内放送っていうのかな、それで呼び出される。それだけ子どもがちょろちょろしてるってことなの。

愛場せつ子：(頻繁にハワイアンズに)連れていきました。次男坊のときは生まれて本当に間もない子ども連れていきましたよ、おむつ持って。だってハワイアン(ハワイアンズ)の中、産着でこう抱っこして歩きましたから。やっぱり何々やったら、お手伝いしたらここに連れていくって、うちらが目標あったから。「お手伝いしたらハワイアン(ハワイアンズ)だよ」って言うから、必ず連れていくの。(ご褒美)だからツトムは産着で行ったね。昔のガーゼの産着でやってましたよ。

愛場誠：おむつ入れのバケツまで持ってね。おむつそこに入れとくの。私らも赤ちゃん生まれたときは、さらし、それで、な？

愛場せつ子：そう。われわれの頃は紙おむつってなかなかなかったからね。なくても結構高かったんで

すよね、紙おむつが。

愛場誠：お金が大変だから。生活容易でないからね。農業一本では。

愛場せつ子：でも、今になってみればいろいろ思い出がね。そうなんですよ。

—原発ができたのはご結婚してからですか。

愛場せつ子：そうですね。原発できたの、結婚してからでしょ。42年だから、われわれ47年だから、5年前でしょ、できたのが。だから、やっぱりその頃は大熊の方は原発ができたから、昔は出稼ぎってあったでしょ、それがなかったのね。みんな原発に仕事に出たから。

—原発ができたことによって愛場さんご夫妻の生活の変化とかはありましたか。

愛場誠：周りの変化はだいぶありましたけども、私らは農業一本でやってたから。

経営の内容を変えただけで。水田の農家だったのが乳牛飼い始まった。

愛場せつ子：酪農ね。

愛場誠：酪農に切り替えてたの。それでだいぶ生活楽になったんだわ。

農業やりながら馬車で、ウシに引っ張らせてたけども、それを乳牛で引っ張らせたの、うち。

—酪農を始めたきっかけは何ですか

愛場誠：私、北海道に行ったんですよ、1年間。酪農の勉強しに。自分が高校のときに、農業高校に行ったもんですから、自分が将来、ウシやりたいなっていうことで、乳牛に切り替えてやっていきたいなっていう気持ちになって、手紙1枚持って北海道に行ったの。で、1年間、勉強してきたんですよ。好きになったのが乳牛だったから。

高校1年のときはニワトリ、高校2年生のときはブタ、高校3年生のときは乳牛っていう。

愛場せつ子：もともとは鶏だったでしょ。鶏を飼ってたんだよね。養鶏やってたのね。

愛場誠：ニワトリは700ぐらいいたから。（牛は一番多いときで）30匹。成牛でね。そこんとこに今度は、毎年赤ちゃん産むように私が調整すつから。人工授精つつつね。

愛場せつ子：ある程度大きくなったら、今度、競りに連れて行って、そこで売ってくるわけね。

愛場誠：（市場は）本宮です、福島の。（大熊から）山越えて。すぐ近くまで餌を買いに行ってたから、だから本宮は別に負担でも何でもなかった。でも、時間はかかりますね、本宮までは。

愛場せつ子：288(国道288号線)通ってって。

—浜通りで乳牛をされていた方は、多くはなかったんですか。

愛場誠：土地が私ら少ないから。愛場家として開拓に入ったのが、大体土地がみんな、部落で持つてる人が開拓に入るもんですから、少なかったのね。だから求められなくて。

愛場せつ子：だから、愛場家は一番最後に・・・。

愛場せつ子：富山から来たから、空いてる所に入れてもらったんでしょ、あの部落の中では。

愛場誠：だから一番大きな事業として乳牛増やすためにやったのは山。山を牧草畑にするために、ブルドーザーですーっと広げたの。それで 2 ヘクタールぐらい広げるために結構お金がかかりましたね。それみんな借金でやったの。だから若さだな。

—それは幾つぐらいのときですか？

愛場誠：結婚してから。

愛場せつ子：だから、40 年前くらいでしょ、山やったのがね。大変な時期あったから今あんだよね。

—そのときにせつ子さんはお勤めとかされていましたか。

愛場せつ子：いや、してなかったです。家の仕事やってね、いろいろ。

愛場誠：本当に背中に子どもおんぶして仕事やってましたから。私はトラクターに乗せて。おんぶしてですよ。そしてやってました、トラクター。でかいトラクターで乗ってね。タイヤ、私の頭より高いですから。一つのタイヤがね。

愛場せつ子：(子供を仕事で)使いましたから。やっぱり子どもたち言うよね、「僕らは随分使われたな」って言いますよ。

愛場誠：だから浪江町でやる十日市、富岡町でやる・・・。

愛場せつ子：えびす講。あれとかも連れていったね。

愛場誠：そういうお祭り。双葉はだるま市か。そういうお祭りのときにはお金 500 円とか小遣いやって連れていくんですよ。それが子どもたちは楽しみだったの。遊ぶにもやっぱり楽しく遊ばないとって。

愛場せつ子：そうだね。夕方になって今度は仕事終わるとみんなでかけっこだね、夜。マラソンするの。

愛場誠：子どもと一緒に自分の所っていうのかな、その所、一回りしてきて。みんなで。だからうちの子どもたちはマラソンはすごく速い。

そして、うちに帰った途端に私を追い抜いて 1 番になるのが長男だったの。やっぱり速い人と一緒に付いて歩けば速くなってくるんだよね、自然に。私もマラソンは好きでしたから。浪江 1 周の駅伝に学校代表として出させていただきました。「おまえもう少し速く走れば区間賞だったのにな」って言われたですよ。私もこんなに太ってましたから。太ってても速かったんだ。

愛場せつ子：本当だね。いろいろ思い出あるね。

—ご結婚された後の大熊の暮らしで思い出深いものはありますか。

愛場せつ子：大熊の暮らし？こっちはいろいろやってきたからね。青少年のといろいろやってきたから。

愛場誠：健全育成指導員(青少年育成指導員)っていうのかな。郡内各地でイベントあったりずっと、そ

こん所に行ってキャンプファイヤーどういうふうにしてやるんだとか、そういうのを教えてくんの。

愛場せつ子：あと、シーズンではスキーだの行ったんだよね。町の役持ってたから。だから、やっぱりその時期になれば子どもいてもそれを犠牲にして。だってトップですから、やっぱり行って指導だ何かして。

愛場誠：長やらお願いされんだよね。PTA 会長とか、区長とか、消防団分団長とか。

—あまり誠さんはお家にいなかったんですか？

愛場せつ子 いなかったですよ。

愛場誠：飲み会も多かったですよ。そこに今度はプラス、酪農やったから、いろいろな今度、なんていうの。研修っていう、外国も行ってきたからね。ドイツ行ったり、フランスに行ったり。

愛場せつ子：オランダ行ってきたでしょ。

愛場誠：オランダ、デンマーク。4 カ国習ってきました。酪農の関係で行ったんですよね。そしてアメリカ、カナダ。

愛場せつ子：2 回行ってんだよね、外国は。その後、次男坊が生まれた、こんな(小さい)の置いて行きましたよ。

愛場誠：だから、外国の向こうに行って現地に到着すつと、電話、私、やるんですよ。朝何時だったなんて言ってもそんな時間関係なく。小さい子ども置いてきてるからやっぱり心配だよね。今、どこに来てんだって。

愛場せつ子：乳飲み子置いていったもんね、生まれてね。

愛場誠：でも、育成会は楽しくやりましたよ。部落の育成会。海水浴やったり。自分で持ってるトラックとかそういうの出して。テント持ったりね。子どもたち海に入って砂だらけになんてでしょ。それを落としてやるのに牛乳缶に水をくんでって。くんでって水を掛けてやるんですよ。

愛場せつ子：あと、新舞子。そのくらいだ、こっち来たのは。一番の思い出は、四倉に来たとき浜に行ったら、岩に付いてる貝。食べれる貝だね。何貝だろ。こんな黒っぽい貝だよ。シジミみたいなこんなね。採って、みんなでやったね。そういう海水浴もやったね、いろいろ。

—育成会の思い出はありますか。

愛場誠：8月、お盆の前の13日、墓参りするんですよね。そのときには町で部落として子どもみこし出すんですよ。わっしょいわっしょいって。たるを、何だるつつうんだ、あれ。酒だるか。それを空っぽにしたやつ。それをみこし代わりに。親たちが作って。そして盆の13日っていうのはちょうど盆踊りやる日なんですよ。うん。そしたらお祭りとか、それと一緒にね。そして、おみこしかついでくれた子どもにはジュースをあげるとか。盆踊りに使うジュース取っておいて。本当、子どもは喜んでおみこしかつぎやるんですよ。一つのイベントだな。イベント盛り上げるために大人が趣向を凝らして楽しくできるように。そして盆踊りも参加してもらえば、まだ帰るときには商品もらえんだよ。札付けてもらっ

てね。

愛場せつ子；(行事が)多い。

愛場誠；PTA も随分多かったな。

愛場せつ子；多かったね。幼稚園、小学校。で、中学校になったら、今度、中学校、「やんねえやんねえ」。私が今度、中学校になったらこの役やったんですよ。理事とか何かのときね。

愛場誠；そうずっと先生がたの歓送迎会、私が夜11時過ぎてからだね、先生たちを自分のうちに帰すのに送り迎え。

愛場せつ子；私は役員やって、車運転、まだ免許取ってなかったから、夜はこっち(誠さん)。タクシー代わりよ。残って。

愛場誠；先生にお金出させないようにして。

愛場せつ子；やってたね。

愛場誠；子どもが多いから、あれは授業参観っちゅうのかな。そうずっと、もう次々とあって。振り分けて、女房と2人で。二つに分けて、何年生行けて。誰ん所の教室を見てこうって。やっぱり子どもは待ってるもんね。待ってる。だからやっぱり、親が来るから役員も押し付けられるんですよ。

愛場せつ子；皆さんも何年か先は(親に)なりますから。こういうことあったね、聞いたねってなりますからね。今度自分たちが子育てのとき、あんなことあった、こんなことあったってなるからね、思い出に。

— どういう団体をつくって、どんな活動をしていたのですか。

愛場誠；あつまっかおおくまのね。柏崎に私ら避難したもんですから、そこん所では大熊から行った人がもう一人いたんです、知ってる人が。井戸川洋一さんっていう方なんだけども、その人とスーパーでいきあったの。

愛場せつ子；いわきナンバー探したんだね。

愛場誠；うん。そして、「このままでは人間駄目になっちゃう」つつったの。そういう話が一致したんだよね、その人と。「じゃあ会か何かつくっぺ」っていう話になって。そして、電話、分かる範囲内で、分かる人だけの仲間を集めるように話し掛けたの。(柏崎にいるって話聞いたことある人にどんどん電話してって)大きく膨らませていったの。そして、あつまっかおおくまっていう、みんなでこの名前ならいいな、分かりやすいなっていうことで話し合っって、そして会をつくって、市長さんにも協力してもらって。

愛場せつ子；だから、大熊は会つくったの一番早かったから、避難した所で。

愛場誠；新潟で一番早かったの。

愛場せつ子；だから本当、テレビの取材攻撃だったね。

愛場誠；報道が来てね。うちまで来ましたから、テレビ。

愛場せつ子；市長さんのはからいで山古志にバス出してもらって行ってきましたよ。

愛場誠：一回そういうことをすると（あつまっかおおくま会の）名前も売れてたんだよね。「いつもご苦労さんです」なんて市長さんも。何かイベントあつと集まってくつから。招待状も出すでしょ。そうすると市長さんも来て隣に座んだ。

愛場せつ子：一番最初は24～25人いたね。

愛場誠：そしたら町で活動費を出してもらい、「今度はどこに見にいこうか」とか。「山古志に行ってきたんだから、今度はあれん所さ行くべ」とか。私らもあるたびバス貸し切ってね。予算も出てくつからちょっとした手出しでバス代も出せんだよね。そしていろんな所に行ってきました。

愛場せつ子：山古志とか、弥彦とか行ったね。だからわれわれは1年間は役やったけど、代わってもらって、その役員さんが今度、どこどこに行こう、どこどこに行こうってあるからね。

愛場せつ子：役員代われれば。その役員さんが三役で集まっているいろいろやって。だからやっぱりわれわれはそこにみんな賛同してやって。もう解散しました。あつまっかおおくまはね。こっち（いわき）に来たから。

愛場誠：あと、向こうでも一生懸命活動を援助してくれる女の人がいたんだわ。

愛場せつ子：別な会では、歌代さんでしょ。歌代さんは柏桃の会を作っており、その方は国とのパイプなんですよ。柏崎にも原発来たでしょ。それからずっとやって、お勉強会ね。そこにわれわれも参加して、ずっとここに来るまでやってきましたね。そこではいろいろな所歩きました、原発の勉強会。だから、そこでいろいろ出会った、今の福島に来てる山名ハジメ教授いるでしょ、京都大の。あの方にもいろいろお話をいただきました。みんないろいろな方と。

愛場誠：あと（経済産業省）木野さん。あの人も私のうちに来てお酒飲んでいきました。私らがイベントあると、「来てるとして私も参加してきました」って。あの人もすぐ乗る人だから。柏崎で知り合ったのね。

愛場せつ子：あと六ヶ所見てきたね。その会で六ヶ所に行ったりして、

一あつまっかおおくま会が解散した後、福島に戻ったんですか。

愛場せつ子：解散して、今度こっちに来ましたよね、われわれ避難して。そして、今度来たとき、久之浜の……。あそこに行ったんですよ。あれが初めて行って。（個人で四倉のほうで避難してる人たちはいっぱいいるが、ぼつらぼつらみんな来てるからってというので、まずは顔を合わせるのに交流会を行った。それがきっかけでふるさと大熊会ができた。）

一ふるさとおおくま会での主な活動はどのような活動をしていらっしゃるんですか。

愛場せつ子：それこそあれでしょ、春はまず総会から始まるよね。そして今度、秋は蟹洗でね。結局、忘年会みたいなもんでしょ、それやって、今度、1月になれば餅つき。その繰り返しだね。

—大熊町で餅つきは昔からされていたんですか。

愛場せつ子：やりましたよ、私は。私のうちでは白でやりました。子どもが多いから子どもの所にみんな送ったりするでしょ。そこに今度、親戚にまたするから、結構つきましたよ。(ちっちゃい頃から)やりましたね。(お子さんで来た後もずっと餅つきは)やりました。

お正月だね。そこにプラス、今度、正月のいなぼつけつてのあるでしょ。やりましたよ、色付けで。そこに今度、お祭りで何か買ってきて、こう提げてやりましたよね。

—それは各々の家でやっていたんですか？

愛場せつ子：やってる方は少なかったね。われわれ嫁いだときは大体機械でやってたから。そしてだんだん今度、子どもが大きくなってきたら、わが家で白なかったけど、「お母さん、白でついた餅食べたい」って、知ってる方に借りてずっと使ってたの。そしてこっちに来て、主人の古希のとき、何つつたら、お金もらったらすぐ使っちゃうからつつて白を買ってもらったわけ。白ときねね。そして今度、みんな子どもたち集まると、餅ついてみんな自分の所に持っていきます。(今でもお正月の頃はみんな)餅つきですよ。お祭りが好きなんですよ。部落みんな。だって大熊でふるさと祭りのときは白集めてギネスに載ったんだね。50 だかやってね。百八つかい、あれ。町外の人たちがいっぱい集まってくるんですよ。餅もらえるから。そしてそれが婦人会が手伝いなんですよ。われわれ婦人会でやったんですけど、やっぱり人間ってというのは無料だと頭から取っちゃうんですよ。持ち上げてこう頭からぽんぽん取っちゃうんですよ。だからあんこだらけでしたよ。振る舞うとき、餅あるでしょ、それを後ろから取るの、みんな、自分たちが。

愛場誠：無償で配るのを取る人が頭の上から手を出して取るって。みんな丁寧に下から物もらうのが普通なんですけども、それを頭の上からやるもんだからあんこだらけになるっていう。

愛場せつ子：だからだんだんと反省して(やり方をみんながもめないように変えた)。でも大熊は結構やってたからね。町の駅伝もあったもんね。

—駅伝はいつあるんですか。

愛場せつ子：(今年は12月)17日。

愛場誠：私ら小学校のときにやりました。大熊町内を1周するんだ。駅前から出て、大川原に真っすぐ行って、亜紀ちゃんの家の前を過ぎて後ろに、野上のほうに行く。そして私らの前を過ぎてずっと駅まで行くの。それが1周コースだったの。

愛場せつ子：だから大熊は(駅伝を)結構早くからやってたんですよ。それでだんだん。そしてだんだんとおおくま駅伝になって、今度は福島県からいろいろ来ることになったからね、参加に。自衛隊とかいろいろチームが来てやってた。(おおくま駅伝に参加してくれる人が)増えてきたの。そこで今度、警察が立ち会いしなくちゃなんないから大変だとなったの。

—それはいつ頃から開催されていきましたか。

愛場せつ子：結構震災前からやってましたよ。そこで今度、商工会とかいろんな方が豚汁振る舞う。だから、活発だったね。町おこしというか、やってた。

—柏桃の輪では、どういう人が参加されていきましたか。

愛場せつ子：われわれ後から参加したからね。だからいろいろな方入ってましたよ。だから大学の先生が結構いろんな方来たね。結構有名な先生は何回も来てるしね。今、それも解散したけどね。トップの方が「70になったら私は辞めるんだ」って言ってたから。

愛場誠：後継ぐ人がいなかったんだね。

愛場せつ子：そうだね。みんなその柏桃の輪も高齢者でしたから。

—柏桃の輪に入った経緯や理由は何ですか。

愛場せつ子：震災で避難してて、別なお世話になった会の人と行ってたんです、店に。そこで柏桃の会のトップの方が来て、「きょう大熊のこういう所行ってきた」って。東京で、渡部正勝さんっていたでしょ。あの方が布芝居やったの。ふるさと塾で。それを東京でやったのをこの柏桃のトップの方が見に来て、そして・・・。

愛場誠：「感動した」つつったね。

愛場せつ子：「感動した」って。そして、「こういうことやったんだよ、愛場さん」つつって。そしてそれから話して、「じゃあわれわれもそういうんであれば今度、その柏桃の輪に申し訳ないけど入りたいんですけど」。そこから入っていった。

愛場誠：それで誘われたんだな。会津までわざわざ見に来たんですよ。交流会やろうっていうことで。

愛場せつ子：だから、そうやって避難していったときは、今度、柏桃の輪でいろいろな、料理教室やったりやりましたよ。

愛場誠：一番手っ取り早いのは食べることですから。

愛場せつ子：そう、(エネルギーを考える活動を)やってたんですよ。だから、この柏桃の輪をつくって皆さんにはいろいろな人がいました。

—必ずしも原発反対で動いていたわけではないんですか。

愛場せつ子：ないですよ。違うんですよ。原発は安全ですよってことで・・・。

愛場誠：講習会とかなんかやると、原発のことをいろいろ講演しながら、原発は安全ですよっていう形で取ってたな。

愛場せつ子：そうだね。

—その活動自体に対してちょっと嫌だなという気持ちはなかったんですか。

愛場せつ子：なかったですよ。楽しかったです。その柏桃の輪に参加するでしょ、その会に。そうすると、そこにいろいろな関連の人が来るんですよ。大学の先生が来てみたりね。やって、そこでいろいろお話し合いしてやってるんですよ。2時間ぐらいかね、毎回やるの。きょうはこういうことをお話ししましょうってやってたんですけど。

—てっきり福島事故を受けて柏崎では原発の反対運動が高まって、
それに向けた勉強会だと勝手に思って聞いていました。

愛場せつ子：それは違います。だからやっぱり震災あってからその人たちは、私たちは行かなかったけど、女川にも行って、そこでまたいろいろな交流していきましたよ。青森の六ヶ所村。そこだってやっぱり原発できて町潤ったからね。

愛場誠：大熊と同じだ。

愛場せつ子：そうだね。

—柏桃の輪に大熊の人はいらっしゃったんですか。

愛場せつ子：私たち2人でした。やっぱりその避難した所でその地区の方が誘ってくれんだよね。だから、そこにプラス、われわれは会もあったから、サロンってなったら、そこに行くと、そこでは今度、トップの方がいろんな学校の先生と親しいと、「昔の遊び方教えてちょうだい」って言われていましたよ。やっぱり声掛けたら出なくちゃ駄目だね。

愛場誠：やっぱり変化を求めてだね。

—変化とはどんな変化ですか。

愛場せつ子：変化でしょ、いろいろね。

愛場誠：何か変化がないかなっていう形で、いろんな所出るの。

愛場せつ子：いろいろな変化って勉強にもなったね。

愛場誠：だから、うちの中に閉じこもってちゃ駄目だよと。やっぱり積極的に出ていかないと。変化を求めてる以上はね。

—あつまっかおおくま会で出会った人とつながりは現在もありますか。

愛場せつ子：つながりありますよ。一番会うのは佐藤右吉さん。

愛場誠：私たちも分かんなかったの。そしてわれわれが部落のお祭りあるか何かで行ったわけだね。そこに奥さんが来たの。あの方たちは（柏崎の）ホテルに避難してたんだね。

愛場せつ子：そう。ホテルに避難してて、そこから散歩か何かに来て会ったの。それからずっと向こうでも交流してて、今度こっちに帰ってきたら本当に定期的に行って、こないだもバーベキューやってきました。だから、ウキチさんとは長いね。ウキチさんの所は定期的に行って、春になればサクラ見にいて、必ずそこに行ってまたバーベキューして。そこに行けば今度マツナガさんの奥さんの所に寄ってみたり。

—模型として具体的にどの時代の大熊町の様子を残したいですか。

愛場せつ子：でも、それは震災前の町のあれだよ。今の役場にあんのは（今も昔の共通の地形の模型で。昨日、交流してきた）古滝で市川さんは、大熊町にどんな町並み、ここに何があったっていうのみんな言われたんですよ。でも、なかなか出てこないもんね。あそこに行こうだったってね。まして町も変わってるから分かんないですよ。だから、そういうのもあったらいいかなと思って。

愛場誠：ジオラマか。

愛場せつ子：ジオラマみたいのね。だってわれわれは覚えてるのでこれからの子どもたちね。「変わった」だけじゃ分かんないでしょ。中には昔のこと聞く子どももいるでしょうから、ここにこういうのあったねってなるでしょうから、そういうのも残したらどうかなと思ってます。

愛場誠：町がどんどん、更地にするでしょ。と、全然分かんなくなるわけだよ。

—特に残したい大熊町の場所やエピソードは何かありますか。

愛場せつ子：大熊町ったら何だろう。もうみんな更地になったら頭に浮かんでこないよね。今やるともうみんな変わっちゃうもんね。今の駅だけでしょ、あそこに。

愛場誠：一番変わったっていうのは果樹団地がいっぱいあったんだよ。キウイとナシかな。それが団地としてきっちりと。3区か、下野上3区。あそこはみんな果樹園だったからね。他の果物よりも大熊の果物はおいしかったんだ。

愛場せつ子：でも、やっぱりこれから皆さん考えてするんでしょうから、町を。だからうちの学も、今回来て。今度われわれの所も除染なんですよ。そうしたらば、「ばあちゃんさあ」って。除染するとわれわれは罹災しちゃうんだよね。でも、5年、6年だったらわれわれいるかどうか分かんないよ。やっぱり1年ごとに町も変わるでしょ。

愛場誠：期待してるの。変わることを期待してるの。どんどん近代化されていく町を私ら死ぬ前に目に焼き付けておきたいなっていう。

愛場せつ子：そうだね。多分変わるでしょ。だってあのメインも今度道路広くなるんですよ。

—町が変わっていくことに対してどのように感じますか。

愛場せつ子：これからの、大熊に戻った方もいるでしょ。そしてその中には子どもさんもでき、多分聞

かれると思うんだよ、「大熊はどうだったの？」って、昔。そのときそれがあれば答えることもできるよね。それが必要なと思った。でも、今の時点で町戻せないでしょ、あれ。

愛場誠：だんだん近代化されてくると思うんだ。その姿もこれはいいんじゃないかと私は思うんです。新しいのできるんだからね。

愛場せつ子：山古志は長岡のアーカイブって所にいろいろジオラマ系で作ってんですよ。何十分の1に縮小して作ってるんですよ。こういう所ありましたよ、ずっと。

愛場誠：震災あったがためにそういうの作ったんだよね。

愛場せつ子：でも、皆さんだって分かんないものね。だからやっぱりいる人でやって、これからの子どもたちに聞かれたとき、「こうだったんだよ」って教えてあげるのをね。

愛場誠：町の中心が今までは、震災前は駅前の周辺が一番にぎやかだったんだよね。ところが今は大川原でしょ。全然違うんだ。ちょっと離れてるもんね。

—お二人がなぜ大熊町に戻りたいと考えているのか教えてください。

愛場せつ子：やっぱり今、ここに住んで、自分の古里だよ。だから今回も、あれ来たでしょ、アンケート、町からの。それにやっぱり戻りたいって書きました。で、これからどうするかとかいろいろ。でも、結構そういう人、ぽちぽちで戻ってる方もいるもんね。

愛場誠：やっぱり古里は空気が違うっていう感じする。大熊に行くとなんか安心するんだよね。おぎゃーって生まれたときから私らは大熊にいたもんですから、やっぱり大熊の空気が私らのあれに合うっていう感じするんだよね。

愛場せつ子：(元あったおうちに戻ることについては)だからそこで学に言ったのは、ライフラインだよ。1軒だけ戻って周りが戻らなかったらなかなか大変でしょ。(元のおうちの場所の)あそこは、上から見ると9軒あって、うちの所も9軒あって、まだ下に9軒あんですよ。

愛場誠：(避難指示が解除されるために)みんな戻りたいって書いてくださいって言われたの。けども、私ら戻りたくても帰れないから、だからって書かないでいたら学に・・・。

愛場せつ子：怒られて。

愛場誠：ここに連絡をされたの。「なんで帰るって言ってたのにあんなこと言ったんだ」って。

愛場せつ子：だからみんなあそこの方たちは戻りたいって書いたみたい。そうじゃないと除染してもらえないから。

愛場誠：だから、下野上1区の区長さん今やってるホリカワさん。その人がテレビのインタビューで言ったんだけど、隣近所の人たちがみんな帰ってきて隣さ行ったとき「おはよう」って声掛けるような感じで言ったもんなら私らも戻っけどもって話だったんだよ。そこまでみんなが戻る気持ちがないとなかなか戻ろうとしても戻れないって。

愛場せつ子：(戻る人数が多いと)われわれは一応解除されんだね。できるの。だけど、皆さん、こっちに自分のうちも構えてるからね。

愛場誠：やっぱり家庭環境にも事情っていうのあるからね、みんな。戻りたくても戻れない事情があるっていうか。

愛場せつ子：(大熊町の空気が違うのはご近所さんの存在も関係していたけど、ご近所さんが一緒に帰ってくるのが)それは無理だね。

—今も昔のご近所さんとの交流はあるんですか。

愛場せつ子：結構ありますよ。お話ししたりいろいろね。今年は部落で集まったね。(総会を)しました。44～45人集まったのかな。

愛場誠：部落、それから老人クラブね。

愛場せつ子：でもやっぱり皆さん、長いから、みんなその場所に住宅構えてるからね。

愛場誠：ほとんどうち造ってるもんね。亡くなった人もいるしね。震災なかったらもっともっと生きられたんだろうけどね。仕方がないわ。精神的に不安定になってくるからね。

—せつ子さんにとっての大熊は、万右エ門じゃなくて北向なのか、

大熊全体なのか教えてください。

愛場せつ子：(古里として考えると)北向のほうが長いもんね、住んでは。北向に嫁いでからわれわれも子育てしながらいろいろな会回ってきたからね。婦人会とかいろいろ、ボランティアとかやってきたから。やっぱり時々夢に出ますよ。夏祭りでも大熊の総合グラウンドでやった花火は、それがじんと来なかった。こっちがやる花火はやっぱりじんと来るもんね。寂しさっていうのかな、花火見ると。きれいなんだけど胸に来るものあるね。大熊に、向こうにいるとき、「いやー、きれいだね」で終わりでしょ。古里があるんだから。こっちは夏祭りであっても違うね、花火見ると。

—今の熊町はお二人にとってどういう存在ですか。

愛場せつ子：でも、やっぱり行くごとに町は変わってんだよね。だから、そうやって一步一步変わっていくのもあれだし、そこにいかにして町民が戻ってくるか。われわれは帰りたいなっていうのが一番の願いだね。

愛場誠：帰るじゃなくて、帰りたいなっていう。希望だね。

愛場せつ子：(ここにおうちもあるし孫もいて)見てごらん、これ、孫の。

愛場誠：(お庭にある)この木はほとんどわが家にあった木と同じ木なんですよ、大体。植木屋さんをお願いして、「自分のうちでこういう木あったからこれ持ってきてくれよ」って。マキの木もあったしね。こういうふうのうちを造って、落ち着くためにこういう木だのなんかはあれしてますから。春はツツジの花が咲いて、こうやって眺めながら「花はきれいだね」ってやって、「花見て怒る人はいないから」って言うんですね。

—ここに今住んでいる家があることは、大熊に戻りづらくなる理由になりますか。

愛場せつ子；娘がいますから。

愛場誠：あと、孫いるんですよ。(誠さんとせつこさんが)「いなくなったら嫌だ」って言うもん。だって孫、風邪が弱くて。時々風邪ひいたり。保育所に行ってるもんだから、いろいろもらってくるんですよ、病気を。

愛場せつ子：熱出したりする。

愛場誠：そしてやると、「医者に行ったときは保育所よこさないでください」ってお願いされてっから、そのときには面倒見なくちゃなんない、2人で。だから私ら出掛けるときには、孫に「勉強会する」って話してんだ。「じいちゃんとばあちゃんは勉強会に行ってくっから」って。

愛場せつ子：「お勉強会だよ」つつったら「何を勉強？」って言うの。(「お勉強会だよ」つつったら)そしたら納得するからね。

※掲載情報は 2023 年 12 月現在のものです。